

▶『幼児の教育』ネット公開に寄せて (16)

時空を超えて

北野幸子



お茶の水女子大学附属図書館のWEBサイト
内の「お茶の水女子大学教育・研究成果コレ
クション (略称 TeaPot)」にてバックナン
バーインターネット公開中。

URL : <http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/>

▼はじめに

一九九五(平成七)年の春に私は、学部間交流の一貫として、ミネソタ大学に特別研究員として九か月派遣していただく機会に恵まれました。津守真先生やジョン・デューイがおられたミネソタ大学はあこがれの大学です。大学で津守先生にゆかりのある本を見つけ、時空を超えて、保育研究でつながる感動を僭越ながらも抱いたことを今日のことのように思い出します。当時私は、保育者の専門性や保育領域の専門性の確立に専門組織がどのように機能し得るのかに関心があり、ミネソタ大学を拠点として、二十世紀転換期の全米規模の保育専門組織の機関誌や会議資料を収集し学んでいました。渡米中にメモリアルンダ大学や、UCLA、イリノイ大学の書庫を巡りました。一生懸命交涉及して複写不許可の赤い文字の入った原本を特別に印刷してもらって入手することができた時の感動や、国

際幼稚園連盟の大会集合写真に着物をきた日本人を見つけてうれしくなったことなど、いまでも忘れることができません。渡米し資料収集することは、大変困難なことです。初めての英語圏での生活は、留学を目標に学部生時代からアルバイトで資金をこつこつと貯めて、四年越しでやっとかなったことでした。

▼ネット版以前の『幼児の教育』の

資料収集の思い出

このたびネット版『幼児の教育』を見た感想を寄せる機会を頂戴し、私はまず、学生時代に読んだ津守先生の「アメリカ通信」をもう一度読みたいと思いました。私たちは、大学院の幼児教育学実地研究の授業で津守先生の書かれたものを徹底的に集めて読み、保育実践研究とは何か、保育現実をどうやって分析することができているのかを探究しました^註。

当時は、復刻版『幼児の教育』を資料室で閲覧し複

写し、みんなで読んだり、要約したものを発表したり、議論したりしました。

▼キーワード検索をしてみても

ネット版をキーワード「アメリカ」で検索すると、63件ヒットしました。「米国」とすると36件ありました。その中には、大学院時代には気づかなかった論文が幾つかありました。たとえばエピソードや紹介のみならず「アメリカ童話から」のシリーズといった保育内容の記事です。ネット検索の問題として、目的とする論文に即、直接手が届く分、実際に手にとって冊子を見る時と異なり、目次やほかの記事に偶然触れる機会が減り、情報が狭く限られることが指摘されます。しかし、一方で、ネットでは別の種類の偶然の出合いというものもあるのだ、ということを実感しました。続いて著者名「津守」で検索すると13件ありました。「あらっ」と思いました。そんなに少ないはずが

ないからです。続いて目次を順番に開いてみました。すると、目次に共著や編集後記などが掲載されていた。ネット検索にはそういった点を注意する必要がありますかと思いました。

パソコンを離れ、大学院生時代に収集した資料を探してみることにしました。著書を除いた論文・記事のみで、ボックスファイル三個分のコピーがありました。その半分以上が「幼児の教育」の記事でした。資料の中に、当時の授業で私が発表したレジュメが出てきました。「文献リストと収集作業のご報告」というタイトルです。資料は自分の足でまず大学構内の四つの図書館や資料室で収集し、続いて、広島女子大学、広島女学院大学で収集したとの記録が残っています。当時は多くの図書館をめぐり、たくさんのコピーをしたものです。

しかし、このたび「アメリカ通信1〜8」(「幼児の教育」第五十一巻第六、十、十二号、第五十二巻第

五、八、十一、十二号)の記事検索と印刷に要した時間は十分ちよつとでした。ところが、われながらおもしろいと思つたことは、ふと気づくと一時間半もパソコンの前で、キーワードを変えたり、記事を開いてみると、ネット・サーフィンにずいぶん時間を費やし楽しんでいたことです。

▼「アメリカ通信」を読ませていただいて

久しぶりに「アメリカ通信」を読ませていただきました。「アメリカ通信2」(第五十一巻第十号 一九五二年発行)に「環境というのは恐ろしいもので一つの要素だけ取り出しても、さっぱりピンとこないのである」といった記述があります。さらに「学問研究について」の欄では、アメリカの大学の「日本民族と日本文化」の講義に疑問をもたれたエピソードが紹介されており、これと照らし合わせて、子どもの研究について同様の過ちを私たちが犯していないか、との警告が

なされています。そして、研究における謙虚さの大切さが述べられています。

読みながら私は、背筋がピンと伸びる思いがしました。この記事を最初に読んだ時に、アメリカで感じた日本に対するステレオタイプのイメージへの大きな疑問と、その時の経験が重ね合わされたことを思い出します。改めて、自分の行っている海外の保育にかかわる研究に、常にこの危険があることをしっかりと意識せねばならないと思いました。

「アメリカ通信」には、平和へのメッセージと人権を考えるメッセージが数多く埋め込まれています。十二年前に初めて読んだ時の感動とメッセージが、時空を超えて再び私に響いてきました。東南アジアの人たちとの人間と人間とのつながりの中で理解を深め、尊敬していく必要についても指摘されています。アメリカのみならず北欧、ヨーロッパの人々との関係や人種問題などの課題も指摘されています。「アメリカ通信3」

(第五十一巻第十一号 一九五二年発行)では、文末に「一体、何をしたらいいのだろうか」とつぶられています。これはご自身へ投げかけられた問いでありながら、私たち読者へのメッセージであるとも思います。

私自身、大学院時代この記事に触れ、「では、自分は何ができるのか?」を問われ宿題を課され、また同時にエールを送っていただいたように感じて読んだことを思い出します。

今日、保育の分野の国際交流が年々進み、保育の重要性を共に社会に伝え、子どもたちの保育の環境を改善し、またその質の向上を図る試みが国境を越えて行われています。普遍的な保育のあり方を探究し、共にその推進を図るグローバル・ガバナンスは望ましい保育の根拠を探究し、それが各国・地域・文化の中でそれぞれのかたちで実践されるよう推奨するものであり、両者が相反するものではないと私は思います。大学内や国内で保育学を専門とする同僚が少ない孤独を

感じることがあります。そんな時、過去の保育研究者の歩みに触れ、他国の保育研究仲間と交流することにより励まされることが多々あります。

ネット版『幼児の教育』は、保育者や保育研究者を時空を超えてつなく媒体となるに違いありません。二〇一一（平成二十三）年夏に、神戸で環太平洋乳幼児教育学会を開催します。アジア、そして世界の保育者との交流を進めるために、自分にできる一つの課題と思います、研鑽を積む覚悟を新たにしました。

▼経済性と資料アクセスの利便性について

このたび『幼児の教育』がネット公開されて、私は何よりも、研究にかかる経済的なバイヤスの軽減につながることで資料アクセスの利便性が高まることが素晴らしいと思いました。

学生時代、自分は紙の収集のためにアルバイトをしているなあ、という気持ちになったことを思い出しま

す。高校生の時の私は、幼児教育こそが大切だと思いい、「幼稚園の先生になろうかな」「行政職について保育の充実を図る政策を考えようかな」「研究者になって保育者を養成しようかな」などと大きな夢を膨らませて、神戸大学教育学部幼児教育科に進学しました。大学では、幼稚園、小学校、中学校、高等学校の免許を取得し、やはり、幼児期の教育こそが奥が深く大切だと思いました。特に、主体的な「好きな遊び」が大切で、その時々に必要な学びがあり、さらに後の学びの基礎となる、このことをどうやって跡づければいいのか、その重要性に関する社会的認識をいかに広めることができるのかと、悩みました。

卒業論文ではデュリーの幼児教育論を研究しました。学部の図書館の書庫には南イリノイ大学から出版されているデュリーの全集があり、その索引を調べ、幼児教育、幼稚園という語がある論文を片端から読みました。しかしこれは、身近に全集があり、それを順

番に読むことができたからです。広島大学大学院の幼児学専攻に進学し、博士課程前期にはアメリカの幼児教育における児童研究運動の展開、後期課程以降はアメリカの全米規模の専門組織について、一次資料を一生懸命集めて、答えを求め、しかし得られず悩みながら読みました。全米教育協会の古い資料を集めに広島から車で名古屋大学に出かけていったこともありま
す。むろん、莫大なコピーの山は私の大切な財産でもあります。転職にあたり、研究室分だけで四トントラックの荷物となりました。

資料収集にかかる経済的負担が小さくなることや資料へのアクセスが容易になることと、資料に対峙する姿勢や先行研究や先輩研究者への尊敬や研究者モラルの維持とは、分けて考えるべきであると私は思います。それは保育の提供体制を整備することと、その中で児童の最善の利益を保証するために活用方法を工夫し、倫理的な配慮を行うこととを分けて考えるべきで

あることに類似するようにも思います。たとえば「休日保育事業」を行うことと、その利用の条件を考慮することとを分けて考えねばならないということです。

学生時代に、恩師の鳥光美緒子先生の厳しく真摯な姿勢から徹底的に資料にあたることの大切さを学びました。『幼児の教育』の記事からも間接的に、研究者の姿勢から多くを考えさせられ、課題を与えられたように思います。ネット公開によって、研究の利便性が高まること、このことが、時空を超えて日本の保育の歴史といまを伝え、先人から学び、世界の保育界の仲間とつながる、大きな牽引けんいんになるといふ喜びを感じます。よって、その益々の発展を心より願う次第です。

(神戸大学大学院准教授)

注 鳥光美緒子・北野幸子・山内紀幸・中坪史典・小山優子著

「保育現実の分析のための方法論的検討―津守真における転回をめぐって―」『幼年教育研究年報』第21巻

一九九九年三月